202407　口語詩句７月　　龍　秀美

＜総評＞
詩作のモチベーションのひとつの在り方に、ある問いがずっとあって、その問いに何かが触れた時、言葉がかたちをとって現れてくる。不可解な形も多いが、その分からなさが分からないまま独自のかたちをとると嬉しい。そんな思いで選んでみた。

雪の日のあなたの影として生きる

長谷川柊香　宮城県
――純白の雪に反映する影は紫を帯びる。幻想的な愛の歌。

地肌揉むと地肌動くぞ夏の星

吉沢　美香　宮城県
――思わず地肌を揉んでしまった。人を動かす作品。風呂上りの夏の星空を思わせる。

出窓をつよく叩いても
みんなは明日を見てる

水木貴奈子　奈良県
――出窓は、時代からはみ出した問題あるいは取り残された願望だろうか。しかし「みんな」は期待される姿としての未来しか見ていない。

肉食と草食ともに野の獣
広い布団に添い寝させる子

貴田　雄介　熊本県
――広い布団は原生林か大草原か。子どもは野生に満ちている。「添い寝」を大人がするのではなく、彼らに添い寝してもらい野生を取り戻す。

青空へ
落下してゆくシャンデリア
掻きむしるほど言葉は遠い

常田　瑛子　山口県
――落下すると粉々に割れるシャンデリアが、無限の空に吸い込まれていく。つまり割れることは永久にないということ。掻きむしる青空も意識の壁も限りなく遠い。

おにぎりの値段が上がる世の中の
君の笑顔はいつも控えめ

金光　舞　埼玉県
――物価の高騰に代表される理不尽と、それが募るほど控えめになる君の笑顔が切ない。

諦めとよく似た尊重
風車

さほ　神奈川県
――ひとりひとりを「尊重」しなければならないとされる現代。その限界の現実にどこか諦めにも似た風車の、カラカラと回る掛け声だけが響く。

ケチャップのとめはねはらい
雲の峰

大西　美優　広島県
――オムライスにケチャップで描く文字の勢いが、ぐんぐん伸びる雲の峰の力強さになる。

妹の足跡だけに繁る羊歯

塩見　佯　沖縄県
――春の女神は一足ごとに花を開かせるという。妹という存在は唯一無二だが、日陰の植物である羊歯を茂らせる陰りも持っている。

おはようおやすみ
いつかさよならだだんだん

カナエ蓮　滋賀県
――出会いであれ別れであれ、あいさつの言葉は強い力を持つ。「だだんだん」というリズムが飛び跳ねて後押しをする。

ビール注ぐ
つばさのひらく音たてて

絵巻　東京都
――ビールは音も味覚のうちだろう。その幸福感が「つばさのひらく音」という官能的な比喩になった。

眠らないありとあらゆる神様は
影を踏んでいて、みんなやさしい

清水　大稔　兵庫県
――人間が寝ているときも、心のなかに住むありとあらゆる「神」は笑ったりつぶやいたりして働いている。なにかしらの影を引き連れているからこそ優しい。